

ければなりません、又、たとへ利益を得たとしても、無闇に之を分配する譯に行かないのであります、この邊のことも諸君に充分諒解して置いて貰ひたいと思ひます。

又、浦賀は、この通りの邊鄙な土地でありますから、交通其他各種の不便のために餘分な費用がかかるのであります、ですから、若しここに、同じ値段で仕事を引受けるものがあるとしたら、云ふ迄もなく註文主は、横濱なり、神戸なりの便利のよい土地へ註文することになるのであります、これは所謂地の利が悪いためで人の力では如何とも致し難いのであります、唯だこの場合、勞銀を安くするか、仕事の抄取を善くするか、又は兩方とも満足にするか、何れにしても他の土地にくらべて一層努力をせなければ仕事を取ることが出来ないのであります。

これも充分諸君に諒解して置いて貰はなければならぬ點であります。
次に、昨今、本社では幸にも纏まつた仕事を持つて居りますが、一體、造船所と申すものは、どの工場にも何時も手一杯の仕事をして居ると云ふことはむづかしいも

ので、例へば船の進水前までは鋸打ちが非常に忙しいが、進水が済むと急に鋸打ちの手が空いて來ます、又、この頃のやうに、商船の仕事が少ないと、木型工場や鑄造工場の手が空くと云ふ風で、會社は常にこんな具合に比較的必要の少ない人までも平等に養つて行かねばならないのであります。

外國では勞働組合が完全に出來て居るために、鋸打ちの仕事が忙しい時には、組合へ申込みと、いつでも必要な丈けの鋸打ちが工場へやつて來る、一つの工事が済むとすぐ他の工場へ振り向けると云ふ風に出來て居るやうで、わが國でも、大阪邊ではこれに似た方法が行はれて、自由に職工の加減をやつて居ると云ふことであります、本社の如き工場では、逆もそんな事は望まれません、従つて一日の勞銀を比較的高く拂ふ譯には行かないのであります、これ等も併せて承知して置いて貰ひたいと思ひます。次は、船の價の下落したことであり、この頃、外國では、材料や、賃銀が下つた爲め、造船費が非常に安くなつて來まして、英國あたりでは、貨物船が噸十六磅